

ものがたり

慈濟

超高齢社会の台湾
安心できる住まいの実現





大愛の扉

誠実な正しい心で、弘法して衆生を利し、
正しい道を歩んで、聞法*して実践しましよう。
心に愛があれば、福を結集して更に作ることができ、
大愛の扉をくぐれば、
人生はいつの世も幸福に満ちるでしょう。

*聞法（もんぽう）とは、
仏法を聞いて自分のこととして受け入れること。

●扉の言葉 文・證嚴法師 訳・濟運 撮影・黃筱哲



台湾は今年、超高齢社会に突入した。慈済は、高齢者が住み慣れた環境で安心して暮らせるよう、住環境の改善や福祉用具の提供を行い、転倒や事故の予防に取り組んでいる。活動の対象地域に制限を設けないことで、都市と地方の資源格差を縮めるべく、



慈済日本サイト

目 次

【編集者の言葉】

最も素朴な願い

善耕／訳 4

【今月の特集】

ミヤンマー・マンダレー大地震 復興への道

御山凜 8

【慈済のSDGs】

超高齢社会・台湾～安心を支える取り組み

高雄外国语チーム

日本語組／訳

30

八万世帯に届いた福祉用具

葉美娥／訳

56

高齢者介護では転倒予防が最優先

葉美娥／訳

49

【證嚴法師のお諭し】

無常の世に情のある祝福

慈願／訳

4

最も交通の不便な山間部まで福祉用具を届けている。

慈済ボランティアは、腰を保護して支える腰サポートの正しい着用方法を、高齢者に指導していた。(撮影・蕭耀華)

離島の中の離島
あの年に私たちが一緒に建てた教室

楊琇光／訳
94

【命の贈り物】
幸いにも私は彼の側にいた！

惟明／訳
67

【親と子と教師、三者の本音】
家族で休日を楽しく過ごす

葉美娥／訳
62

【グローバル慈善】
フィリピン・ボホール島
あの年に私たちが一緒に建てた教室

何慧純／訳
72

【行脚の軌跡】
達成感

濟運／訳
100

慈済の出来事
6/20
7/21

濟運／訳

106

最も素朴な願い

慈濟人は、今年も仏陀の生誕日、母の日、世界慈濟デーを祝つて各地で次々と灌仏会を催した。五月十一日午前七時に、花蓮静思堂の道侶広場で式典が催され、国内外の一万人以上がオンラインで同時に参加した。台湾と六時間の時差があるジンバブエでは、現地のボランティアは午前一時に摂氏九度という気温の中で式典を催した。インドでは、当地で最大の涅槃仏を有する国際仏教僧侶養成学校において、初めて現地ボランティアが式典の準備を担当した。

仏陀の生誕日前夜、台灣の慈濟人は集会所やリサイクルステーション、さらには街角でも集まり、「移動式灌仏会」を行つた。民衆は儀式を通して仏陀に話しかけたり、病氣の家族のために祈つたり、中学受験を控えた子供のた

めに祈りを捧げたりした。最後は歌声と共に、人心の淨化と社会の平和、災害のない世界を願つて祝福した。

灌仏会の規模の大小に関わらず、人々の最も素朴で誠実な願いは、平穏と健康である。しかし、平穏は当たり前のことはない。今期の月刊誌『慈濟』では、ミャンマー・マンダレー地震後、慈濟人が被災地で継続して支援活動をしている様子をレポートしている。ミャンマーの人々は、長年内戦と貧困に苦しめられてきた。三月二十八日、僅か数秒の大地震で被害が発生し、被災地は倒壊した街の再建が待たれるまま、将来を見通せない状況にある。ボランティアは、被災者が雨季の夜に安眠できるようになると、各地から空輸して、一千床以上の福慧ベッドを含む生活用品を、僧侶や民衆に寄贈した。マレーシアの慈濟ボランティアも国境を越えて支援に向かい、五月十四日に最初の

プレハブ教室を完成させ、六月の新学期開始までに一定の数に達するよう尽力し続けた。

今月号の「慈済のSDGs」シリーズでは、再び「安全な住まいへの改善」と「エコ福祉用具プラットフォーム」という二つの慈善プロジェクトを取り上げて探究し、台湾の超高齢社会において發揮される効率と、国連の持続可能な開発目標のそれぞれとの繋がりについても考察している。手すりの取付工事や、車椅子や電動ベッドなどの福祉用具の配達・回収といった小さな取り組みを軽く見てはならない。それは、医療費の負担と社会における介護コストの増大を軽減でき、予防医学の考え方についものである。

国際情勢が不安定な今、私たちは善の循環をより必要としている。愛は多いか少ないかではない。ミャンマー地震の後のように、かつての慈善救済活動で慈済と縁を結んだ多くの人が、ボランティアの呼びかけで災害支援の寄付をした。一枚のコインであっても、手を合わせて祈ることであっても、それは他人の身になつて思いやり、他人の苦しみを自分の苦しみとする善行なのである。

最後に、ミャンマーのボランティア、郭宝鉅（グオ・バオユ）師姉が配付活動で行つたスピーチの一部を読者と分かち合いたい。「親愛なるおじさん、おばさんたち。皆さんが受け取った米や食用油は、どこかのお金持ちが寄付したものではありません。慈済の会員がヤンゴンで洗濯の仕事をして得た収入から、毎月五百チャットを人助けのために貯めて寄付してくれたから購入できたものなのです。マレーシアでは様々な業種の人がこの善行に参加しています。ビルマ語の発音で『慈』は慈悲深い愛を意味し、『濟』は衆生を救うことを意味していますが、これらの物資は、数え切れないほどの善の心と慈悲が集まって形になつた布施なのです」。（慈済月刊七〇三期より）



ミャンマー・マンダレー大地震 復興への道

三月二十八日、マンダレーで大地震が発生した。慈済ボランティアは被災地への緊急支援に駆けつけ、十八日間支援し、ヤンゴンに戻ってわずか一週間後、再び被災地へと向かった。酷く損壊した寺院や孤児院の有り様と、永遠に引き裂かれた人々の悲痛な叫びが、今も彼らの心に重くのしかかっている……。



寺院によって設立されたピー・ロン・チャン・タール孤児院では、180人の子どもたちが暮らしている。4月11日、ボランティアがパンや牛乳、米などの食料を届けた。僧侶の案内で、ボランティアたちは被災状況を見て回った。(撮影・キン・ヤダナーテイン)

「ホーテルの窓がギシギシと鳴り、ゴーッ」という音が聞こえました。

夜、ボランティアたちは非常用持ち出し袋を抱えて休み、灯りをつけたまま寝るなど、皆がそれぞれ工夫して夜を過ごしました。余震が頻繁に起き、時にはマグニチュード五・五にも達し、左右に激しく揺れました。怖かったのですが、それでも皆で被災地に向かいました」と慈済ミャンマー連絡所の責任者である李金蘭（リー・ジンラン）さんが、救援活動中の一幕を淡々と振り返った。

三月二十八日、ミャンマー第二の都市マンダレーで大地震が発生した。ボランティアは四月一日に被災地に入り、緊急支援物資を配付した。また「仕事を与えて支援に代える」活動で被災した住民を雇つて雨よけの簡易テントを建て、一時的だが住めるようにした。この作業は、四月二十日に被災地を離れるまで続いた。疲れを癒す暇もなく、四月二十七日から再び複数のチームに分かれてマンダレーへ向かつた。今回の任務はさらに明確で、物資の配付だ

けでなく、寺院や学校、地域の状況を記録し、中長期支援に向けた情報収集を行つた。

地元住民だけでなく、宿泊施設にいるボランティアも余震には強い恐怖を覚えた。しかし、同じように恐怖を覚えたからこそ、できる限り早く、全力で支援を行つたのである。

4月下旬、ボランティアがマンダレーに到着した初日の未明、再び地震が発生し、多くの住民が慌てて外に飛び出した。ボランティアチームは工場の建物へ避難し、福慧ベッドの上に段ボールを敷き、蚊帳を張つて一夜を過ごした。（撮影・陳勇勝）



ボランティアはブルーシートを購入し、「仕事を与えて支援に代える」活動に村民を招いて、マハ・ガンダーヨン僧院に雨よけのテントを建て、被災世帯を受け入れた。（撮影・郭威陽）



プレハブ住宅の支援建設 安心な住まいと学びの場

現地調査チームはミャンマーとマレーシアのボランティアで構成され、第一段階の緊急援助を終えると四月二十三日に花蓮の静思精舍に戻り、現地の様子や住民と僧侶の生活状況、建物の被害状況を報告した。これらの報告は今後の支援方針を定めるうえで重要な参考情報である。

その後チームは、花蓮本部の管理職及び職員たち、そして、同行したマンダレーの孔教学校の三名の校長たちと話し

失った僧侶や住民が、より快適で尊厳のある場所で雨季を過ごせるよう支援することにした。「私たちは子どもの頃からお寺に遊びに行っていました」と李さんは幼少期の記憶を語った。「お寺には果樹がたくさん植えられていて、地域の子どもたちはよく果物を摘みに行つたものです」。寺院や仏塔はミャンマーの人々にとって、神聖であると同時に親しみ深い存在である。上座部仏教の信仰は暮らしに根ざしており、多くのミャンマー人男性は一生のうちに一度は短期間の出家を経験する。こうした宗教的儀式や自己

合った。孔教学校は現地で最大の中国語学校だが、校舎の多くが倒壊した。「四つのキヤンバスは全て被害を受け、特に北キヤンバスの被害が深刻です」と丁澤民（デイン・ズアミン）校長が説明した。六月初めの新学期に先立つて、慈済は、四つのキヤンバスに通う八千人の生徒が安心して登校できるよう、孔教学校に四十一のプレハブ教室を建てる計画を立てた。チームは孔教学校だけでなく、他の被災した学校も訪問した。

また、仏教寺院や地域のためにプレハブ住宅を建設する計画を立て、住まいを

修行を通して慈悲と自律の心を養うのは、仏教を心から尊敬している気持ちの象徴だと言える。

李さんは、マンダレーは上座部仏教の文化の中心であり、僧侶たちと交流する中で彼らの親しみやすさと修行精神を感じ取つたと語った。上座部仏教の戒律のもと、僧侶たちは日常的に托鉢を行つていますが、それは世俗的な欲望を放下することを象徴している。民衆は、「布施」は功德を積む大切な行いだと信じており、寺院に対しても惜しみなく寄付や食物、薬品を提供している。深刻な被害を受け



現地調査チームは4月27日に再びマンダレーに到着し、二段階目の支援活動と資料収集を開始した。その夜、郭宝鈺さん（左の写真の右1）と若いボランティアたちが翌日のスケジュールについて話し合っていた。（撮影・陳勇勝）

た地域の中には、僧侶たちが被災後の住民の生活問題を考慮して、托鉢を一時的にしない方針を固めた所もある。

教育機関としての役割も担っている寺院も少なくなく、近年のミャンマー国内の内戦により、多くの家庭が避難を余儀なくされている中、人種を問わ

ず避難してきた子どもたちを受け入れている。自然災害が起きるたびに、寺院はいつも寺の門を開け放つて被災者を受け入れてきた。今回も例外ではなく、多くの寺院 자체が深刻な被害を受けていたにもかかわらず、その役割を果たしている。多くの歴史ある寺院や



マンダレー地方では、およそ700の仏塔や寺院が地震で被害を受けた。
バガン王朝時代に建立されたタダーウー郡のイェー・ター・ファン僧院
で、僧侶がボランティアに被災状況を説明していた。(撮影・陳勇珽)



仏塔が損壊したことに、ボランティアは心を痛め、物資の支援や臨時の住まいの建設に加え、修復や再建の計画にも協力したいと考えている。

ビルマ暦の新年、祈りで傷を癒す

イエー・ター・ファン僧院では、仏龕（ぶつがん）が瓦礫でいっぱいになり、仏像も建物の損傷で被害を受けていた。

ミエ試験会場で「仏法高等試験」を受験していた。三棟のうち三階建ての一棟が倒壊し、二百人の僧侶が閉じ込められた。最終的には八十人が犠牲者になり、重傷者も多数いた、と推定される。

地震が発生した時、一千人以上の僧侶がウー・ラ・テイン僧院のマハーオン

ター・サン郡の弘法協会は、四月十七日、ビルマ暦の新年初日に、ウー・ラ・テイン記念広場前で僧侶を供養するため、經典読誦による祈福大法会を共同で開催し、三十四の寺院から五百五十人の僧侶が参加した。従来の祈福会では僧侶たちは民衆の方を向くが、長老の提案により、今回は、僧侶たちはウー・ラ・テイン・ビルの方を向き、民衆の先頭に立って読經し、祈りを捧げた。そのビルの後方は、僧侶の死傷者数が最も多かった場所だった。

被災地での数日間、ボランティアたちはたびたび民衆が「ずっと誰かが助け

向き合つた。

人の苦しみは自分の悲しみ
慈悲を行動に変える

ボランティアは中長期の支援に向けて、より全面的な現地調査を実施した。寺院や学校の詳細な地理的位置分布図、数やニーズを含めて調査した。慈済基金會の熊士民（シユオン・スミン）副執行長は、「どこにプレハブ住宅を建てるのが適切かを評価する必要があります。寺院の修復には専門家が必要であり、元の設計図通りに修復すべきかどうか検討

を呼んでいる声が聞こえる」と言うのを耳にした。大地震後の数日間、甚大被災地一帯には助けを求める声があちこちで聞かれ、多くの人は恐怖を感じていた。その恐怖が、今もなお消えていないのかもしれない。ただ、被災後は、生き延びることに追われ、悲しむ暇すらなかつた。

四月十七日の祈福会は、参加した人々にとつて深い意味を持つものとなつた。民衆は亡くなつた肉親のために祈り、法師たちは逝去した仲間や学生のために祈りを捧げた。人々は仏教の儀式を通して、心の痛みと悲しみに正面から

しています」と指摘した。ボランティアは五月にも首都ネピドーを訪れ、宗教文化大臣のウー・テイン・ウー・ルイン氏と面会し、仏塔の被害状況をより詳細に把握し、どの地域がより支援を必要としているかを確認した。

五月一日から六日にかけて、ボランティアは六十六回にわたる物資の配付活動を終え、寺院や孤兒院、老人ホームに食料、福慧ベッドなどを贈呈した。五六日には、慈済はネイ・ミン僧院とバウドゥウインジ町のレイ・キュン・マン・アイ・ミン僧院には三百人の寄宿生があり、



4月17日はビルマ暦の元旦にあたり、祈福会で大衆が建物の方を向いて祈りを捧げた。建物の裏は当時、試験に訪れた僧侶の犠牲者数が最も多かった場所である（左の写真）。ボランティアたちは敬意をもって、僧侶に供養する生活物資を袋に入れた（右の写真）。（左の写真 撮影・陳勇璽）（右の写真 撮影・郭威陽）

室を建設した。五月十日から、慈済は再び五日間にわたる米の配付を開始し、第二段階の支援活動は五月十五日をもつて一段落した。

「私たちちは、できる限り上人の目となり、手足となりたいと発願しました。上人が皆さんを慈しむ心を行動で表したいのです。疲れていないと言つたら嘘になりますが、とても法悦に満ちています。慈済の奉仕は、単に作業をこなすだけではなく、慈悲喜捨の心を学ぶことなのです」と郭さんが言つた。

ボランティアたちはカメラの前や静思

精舎に戻つて災害の状況を説明した時、堅い意志を持ちながらも樂観的な一面を見せていました。しかし、目の前で多くの家族が家と命を失い、歴史的文化財が失われた現実を前に、重い心はどこに持つていけばよいのか？李さんは、「多くの悲しい出来事を目の当たりにしました。親が子を失う姿も……このような無常に直面して、どうすれば慰め、寄り添うことができるでしょうか？」本当に、少しでも心の安らぎを届けたいと思つています。私たちにできることは、それだけです」と語つた。（慈済月刊七〇三期より）



地震発生後、仏教寺院は大きく損壊した。ボランティアの李金蘭さん（左から2人目）らは5月6日に宗教文化大臣（右から2人目）を訪問し、修復支援について話し合った。（撮影・陳勇斑）

多くが北部の内戦地域から来ている。被災後は皆一階の狭い空間に身を寄せ合っていたが、混雑と蒸し暑さが続いたため、沙弥（しゃみ）たちは皮膚病にかかり、搔きむしってできた小さな傷がなかなか治らなかつた。ボランティアは医療スタッフを招いて、診察してもらつた。

五月八日、マレーシアのボランティアチームが到着し、孔教学校にプレハブ教

マンダレー大地震 慈済の緊急支援

第一段階
4月2日～20日

第二段階
4月27日～5月15日

- ・「仕事を与えて支援に代える」活動：参加者数延べ **1,342** 人
- ・食料配付：米と食用油を **11,818** 世帯に配付
- ・緊急支援金の贈呈：**504** 世帯
- ・医療物資の配付：薬品・マスク・手袋などを **4** つの病院に。
- ・その他の支援物資：蚊帳、テント、ゴザ、福慧ベッド、照明セット、ペットボトル入り飲料水、パン、即席麺など。



- ・台湾時間3月28日14時20分に強い地震が発生。
- ・震源地はマンダレー付近。
- ・地震の規模：MW（モーメントマグニチュード） **8・2**、ML（マカルマグニチュード） **7・7**、震源の深さは **10** キロメーター。
- ・死者 **3**、**757** 人、行方不明者 **116** 人、負傷者 **5,107** 人、家を失った人は **206,977** 人。



◀5月6日、ボランティアはネイ・ミン僧院で、僧侶や寺院が保護している内戦孤児たちに施療を行った。(撮影・郭威陽)

慈濟福祉用具チームは、桃園市復興区に車椅子や歩行器など700点以上のエコ福祉用具を届けた。地域住民にとって、山道を行き来して運ぶ苦労が軽減された。（撮影・蕭耀華）



慈濟のSDGs 超高齢社会・台湾

安心を支える取り組み

台湾は今年、超高齢社会に入りました。慈濟は、高齢者が転倒や事故を起こすことなく、最も慣れ親しみのある環境で、安心して暮らせれるよう、住環境の改善や福祉用具の提供を行っている。これらは地域を問わず提供されており、都市と地方の格差縮小にも寄与している。なかでも、エコ福祉用具の循環利用は資源の浪費を抑える上で大きな役割を果たしている。こうした取り組みは、予防的な慈善ケア活動であり、国連の持続可能な開発目標における目標三、目標十、目標十二の具体的な実践でもある。



【慈濟の活動×SDGs】シリーズ

八万世帯に届いた福祉用具

慈濟工コ福祉用具プラットフォーム

- ・各業界から提供されたり、リサイクルされたりした福祉用具を洗浄・消毒・整備した上で、必要とする家庭に提供。
- ・台湾全土の各県・市に一つのプラットフォームがあり、計134の工コ福祉用具拠点を設置し、地域の枠を超えた利用が可能。
- ・二〇一七年三月の設立以来、八年間で延べ134,363点の福祉用具を89,057世帯に提供。

撮影・蕭耀華（月刊誌『慈濟』撮影者）文・葉子豪（月刊誌『慈濟』執筆者）訳・高雄外国语チーム日本語組

「母」の日のお祝いとして介護補助を申請し、今すぐ歩行車を持ち帰ろう

——台北市南港展覧館で開催された福祉

用具・長期介護展では、各社が自慢の製品や技術を余すことなく展示していた。

払いさえすれば、車椅子や歩行補助車などの介護用品をその場で持ち帰ることができる。

都心や地方都市の「中心部」に住む住民は、このような福祉用具のリソースの利便性を享受できる。しかし、山間部や離島などの遠隔地は、未だにその恩恵が届きにくい。しかも、福祉用具を最も必要としている高齢者や障がい者は、往々にして移動が困難で、情報へのアクセスも限られた恵まれない立場の人もある。その上、曲がりくねった山道や搖れの激しい道に隔てられたこれらの地域では、都定通知書を提出し、補助額との差額を支

市部の住民に比べて、緊急に必要なリソー

スを手に入れるることは困難であった。

避難していたのは、不幸中の幸いでした。

福祉用具七百点を一挙に山村へ

福祉用具・長期介護展が活況を呈する中、慈濟のボランティアたちは、車椅子、トイレチエア、歩行器などの軽量福祉用具、さらには重さ百キロもの電動ベッドを車に積み込み、慈濟三峡志業パークを出発して、桃園市で最も山奥にある村へと向かった。

「この復興区羅浮（ラハウ）里にある合流という集落では、十年前、土石流で十四戸が埋まりましてね。前夜に全員が

台風13号（ソウデロア）後に、慈濟が被災者のために永久住宅を建設した功績を振り返ったのは、復興区の蘇佐璽（スウ・ズオシー）区長である。今回、ボランティアたちは、地域の高齢者や移動が不便な人のニーズに応えるため、各種福祉用具七百点以上を届けた。「皆から来たボランティアの許文虎さん（右）は、台湾本島のボランティアや地元の介護士（左）とともに、地域の利用者をサポートしていた。



さんは、政府と協力して高齢者を支える、とても重要な存在です」と、蘇さんは称赞した。

「原住民集落のお年寄りは、若いころからずっと働き詰めなのですが、年をとつて腰や背中が痛むようになつても、我慢強い彼らは、限界になるまで医者にかかりません」と語るのは、今回の連絡業務を担当した北部地区慈済ボランティアの謝国榮（シエ・グオロン）さんだ。謝さんによると、慈済では、以前、阿里山郷などの山間地域で役場と連携して実施した全戸ニーズ調査と福祉用具配付の経験を踏まえ、高齢者に対し、杖などの

生活補助具を日常的に活用して、自分の体を守るよう呼びかけているという。急峻な山々の間に点在する集落は、医療資源が届きにくい。復興区の「後山」と呼ばれる東部地域のような山奥の集落からは、山を下りて市内に行くだけでも、車で二時間以上かかる。ましてや、トラックを借りて、車椅子やベッドなど中・大型の福祉用具を家まで運ぶとなれば、容易なことではない。だからこそ、慈済が自分から各集落に福祉用具を届けにやって来たとき、多くの人が満面の笑みを浮かべたのである。

加拉（クアラ）集落の文化健康セン

ター（原住民地区における地域密着型の介護・福祉拠点）では、アユン・ユミン牧師が説明してくれた。ここでは腰痛ベルトや膝用サポーターの需要が多いといふ。なぜなら、寝つきりの人はすでに長期介護制度のもとで在宅介護を受けており、センターにやつて来ることができるのは、まだ動ける人だからである。

八十歳を過ぎた林（リン）さんは、障がいのある娘の車椅子を押しながらやつて來た。その車椅子を見て、ブレーキが緩んでいることに気づいた慈済ボランティアの許文虎（シュウ・ウェンフー）さんは、すぐに適当な工具を探して修理

した。

他のボランティアは林さんに腰痛ベルトの着用法を教え、彼の昔語りに耳を傾けた。

爺亨（イエヘン）集落に住む介護士の高麗枝（ガオ・リーチー）さんは、父方の伯母のために電動ベッドとマットレスを申請した。こうした重量のある福祉用具を申請者が自力で持ち帰るのは難しい。ボランティアたちはトラックで玄関先まで運び、ベッドを押して中まで搬入した。市内の古いアパートの狭い階段を上るのに比べれば、今回の搬入作業は楽

な方だった。

「伯母は高血圧と喘息があります。寒

い日によく喘息が出ます。それ以外には、これといった病気はありません」と高さんは言う。彼女の伯母は九十一歳という高齢で、歩行車を押せば歩けるが、付き添いが欠かせない。体調がすぐれない日には電動ベッドを使うことで、介護する家族の負担が軽くなると高さんは話した。

もう一人、高さんという男性は農作業用の車で福祉用具を取りに来た。今まさに働き盛りの彼には、八十一歳の母親がいる。膝の関節が弱り、痛風も抱えているという。「部屋からトイレまで遠くてね……。それで、トイレチエアを申請することにしました。ベッド脇に置いておき、

母が使い終わったら、私たちが処理するようになります」。

台湾は今年、超高齢社会に突入した。

つまり、人口の五人に一人が六十五歳以上の高齢者である。お年寄りや障がいのある人々のニーズに応えるため、現行の長期介護二・〇政策では、「福祉用具・住宅バリアフリー改修サービス」を提供している。満六十五歳以上の高齢者、五十五歳以上の原住民、五十歳以上の認

心身を尽くして 資源をつなぐボランティア



知症患者、要介護状態の障がい者であれば、自宅のバリアフリーリフォームや福祉用具のレンタルと購入費用として、三年以内に最高四萬元の補助金を申請できる。

政府の補助により、福祉用具を必要とする人々の経済的負担は軽減された。しかし一方で、不要となつて放置されたり、捨てられたりした福祉用具が環境に少なからず影響を与えている。

「私はついぶん前からトラックを運転しています。最初は、環境保護の一環と腰を守って、支える腰痛ベルト。その効果を十分発揮できるよう、慈濟ボランティアがお年寄りに正しい着用法を指導していた。

して回収した物を運んでいたのですが、福祉用具が回収されることもありましたね。それを、必要な人に届けて、役立ててもらいました。最初は関山地域だけだったのですが、その後、花東縱谷全体に広がっていきました」と、台東に住む慈濟ボランティアで、八十歳になる陳卓瓊華（チエンヅオ・チュンホワ）さんは語る。車を運転して福祉用具を運ぶだけでなく、洗浄や消毒作業もこなすという陳卓さんは、「私は『運転手兼荷物運び係』と笑った。



環境保全ボランティアが回収した福祉用具の多くは、まだ十分に使用できるもので、社会的にも膨大なニーズがあると感じた慈濟は、二〇一七年三月、花蓮で「エコ福祉用具プラットフォーム」を設立し、台湾全土の各県・市に展開していく。ボランティアたちは、福祉用具をきちんと清掃・消毒・整備した上で、必要とする人々に無償で提供している。慈濟の介護施設からも、在宅介護の利用者への支援を依頼されることがよくある。

「私たちは台中慈済病院や犯罪被害者

100キロを超える電動ベッドの運搬は、山間部でも市街地でも数人がかりだ。

保護協会と連携し、或るケースを支援しています。その人は交通事故で頸椎を損傷し、半身不随となつた人ですが、チームが訪問した際に新しい電動ベッドが必要だと分かり、翌日の土曜日に福祉用具プラットフォームに連絡すると、日曜日にはもうベッドが届きました」。

車椅子を押して 離島の蘭嶼に上陸

二〇一七年から今年四月末までに、十三万四千点余りのエコ

福祉用具が八万九千以上の家庭に届けられた。その範囲は台湾本島の各地域のみならず、金門、馬祖、澎湖の各県と蘭嶼、綠島、小琉球などの離島にも広がっている。

今年四月、福祉用具チームは蘭嶼を再度訪問した。福祉用具を車に積み込み、慈濟三峡志業パークを出発したボランティアたちは、宜蘭、花東縱谷を経て、一路、台東へ向かった。台湾を半周以上旅した後、明くる日の早朝に船で二時間ほどかけて、ようやく現地に到着した。

「ここ蘭嶼には、改善すべき点が山ほどあります。一番必要なのは、杖と車椅子です。慈濟が来てくれて、本当に感謝

り自分の手を動かして、タロイモやサツマイモを植えたりしているのです」と、苗栗県の山間地域の出身で、数十年にわたり蘭嶼で暮らしてきた「蘭嶼のお嬢さん」こと羅さんが言った。若者の多くは生活のため、蘭嶼を離れて台湾本島で働いている。そのため、島には高齢者が多い。一人暮らしや老夫婦だけの世帯の半は自力で生活しており、周囲の支援が切実になつてている。

この島に暮らすタオ族の伝統では、亡くなつた人の持ち物を使うと、亡靈に取り憑かれるという。慈濟のエコ福祉用具も、当初、このタブーに直面した。ボラン

しています。これで蘭嶼も少しずつ元気になれそうです」と話すのは、地元蘭嶼に住む八十三歳の見習いボランティア・陳茂男（チエン・マオナン）さんだ。陳さんは島の慈濟会員たちと共に会場設営やデーツの照合、誘導など、地元住民が福祉用具を受け取る手伝いをした。漁人社区発展協会の羅大偉（ロー・ダーウェイ）理事長は、配付を手伝うかたわら、年配の「牧師夫人」李さんのために四点杖を申請し、自ら家まで届けた。

「お年寄りは七十、八十になると、子や孫がいたとしても、迷惑はかけたくないと思っているのです。だから、できる限り

ティアたちは現地の文化を尊重し、衛生所（地域保健センター）や社区発展協会と連携しながら、宣伝し続けてきた。それから三年、今では蘭嶼にある六つの集落全てが、少しづつエコ福祉用具を受け入れるようになつてている。

福祉用具の配付に二度参加した東清社区発展協会の陳雯珊（チエン・ウエンサン）理事長は、慈濟が提供したエコ福祉用具によって、地域の医療用具不足が緩和されたと話す。「島には医療機器や福祉用具を取り扱う店がなく、入手するには島外へ出る必要があるため、費用がかさみます。そのため、住民は利用

都心や地方都市において、福祉用具プ

健康関連資源の格差を縮小

を諦めてしまうのです。慈済が届けてくれた車椅子は、協会の事務所に何台か置いておき、誰かが急に怪我をしたり、家庭で必要になつたりした時に貸し出せるようっています。

ラットフォームは通常、利用を希望する人から連絡を受けた後、在庫から用具を手配し、ボランティアに連絡して配達してもらうか、利用者に拠点まで取りに来てもらっている。一方、山間部や離島など、アクセスしにくく、人口も少ない過

疎地域では、役場や地元のリーダーと協力し、まず全戸を対象にニーズ調査を行つて名簿を作つた上で、日時を決めて



台東市富岡漁港の埠頭で、各種福祉用具を写真のような様々な方法で船に積み込み、海を渡って蘭嶼に届けるボランティアチーム。3日にわたる長旅だが、待っている人がいる以上、一刻も無駄にできなかった。

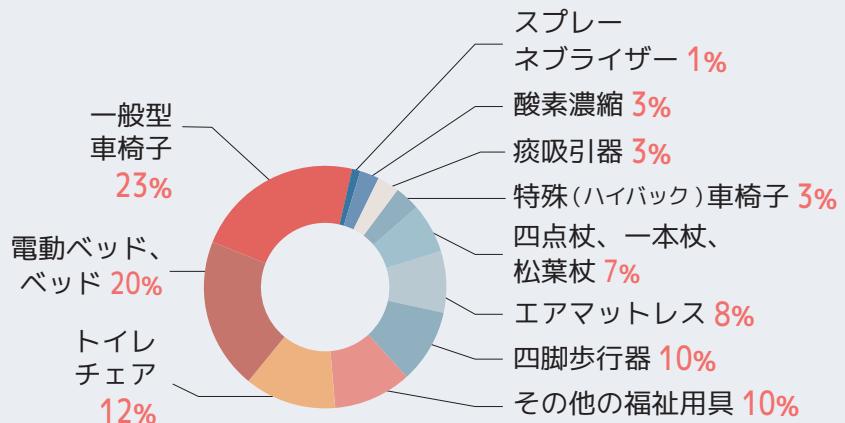
大規模配付を行い、住民のニーズに応えている。

この取り組みは、ニーズに合ったエコ福祉用具を届けることで、病気の苦しみを和らげると同時に、物の寿命を大切にし、ごみを減らして環境を守るという功德につながっている。国連の持続可能な開発目標の十七の目標に照らして見ると、慈済エコ福祉用具プラットフォームは、目標三の「すべての人に健康と福祉を」が掲げる「ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（すべての人が基礎的な医療サービスを受けられること）」や、目標十の「不平等をなくそう」に応えており、

慈済エコ福祉用具プラットフォーム



エコ福祉用具ミニ統計



2024年配送量トップ3

- ① 一般型車椅子 9861 件
- ② 電動ベッド、一般型
ベッド 8655 件
- ③ トイレチェア 5294 件

福祉用具の
申請・回収サービス



健康格差や社会参加の機会の格差を縮める取り組みとなっている。また、目標十二の「持続可能な消費・生産形態の実現」にも寄与している。

一つひとつの活動により、支援を待つ僻地の高齢者や障がい者に、都心や地方都市に暮らす人々と同様の福祉を届けています。慈済人は、たとえどんなに遠く、到達しにくい場所であっても、支援を求める人たちを決して見逃すまいという一心で、困難に挑み続けている。

(慈済月刊七〇三期より)

エコ福祉用具プラットフォームは、県や市の枠を超えて利用することができ、離島にも拠点が設けられている。金門の慈済ボランティアは、古民家で暮らすおばあさんにトイレチエアを届けると共に、生活の様子を気遣い、話を聞いた。



SDGsの 対象領域



1 貧困をなくそう
住み続けられる
まちづくりを



3 すべての人に健康と福祉を
つくる責任、つかう責任



10 人や国の不平等を
なくそう

高齢者介護では転倒予防が最優先

一人暮らし高齢者、老老世帯、障がい者に安全な居住空間を提供するためには、地域ケア拠点を開設して高齢者の社会参加を促し、認知症や機能の衰えを遅らせることや、さらに、エコ福祉用具プラットフォームを立ち上げ、介護資源を提供するなどの方法がある。これらは全て、慈済が高齢化社会に対応して取り組んでいる重要な施策である。

人の高齢化は、台湾だけのことではなく、世界的な趨勢である。超高齢社会においては、如何に地域ケアを推進していくべきだろうか？

高齢者の体が健康であれば、家族の負担は少なくなるが、万一転倒して寝起きになれば、家族全体の心配事になる。證嚴法師は、台湾の社会問題と高齢者問題に关心を寄せていているので、慈濟は

二〇一二年から高齢者の住まいの安全性改善に取り組んできた。一人暮らしの高齢者や老老世帯及び障がい者に対し

て、安全な住まいを提供しているのだ。二〇一四年になると地域ケア拠点を開設し、高齢者の社会参加を促して認知症や機能の衰えを遅らせるプロジェクトを始めた。二〇一七年には、一步踏み込んで、エコ福祉用具プラットフォームを立ち上げ、福祉用具を必要とする家庭に提供している。これらは高齢化社会に応じた重要な施策である。

政府の「介護2・0計画」の中で、高齢者と障がい者助成項目に、室内バリアフリー空間への改善は入っているが、申

請や審査の手続きを待てない人や、一人暮らしなので申請方法が分からぬ人も多い。

そこで、慈濟は二〇一二年に花蓮県秀林郷と新城郷の高齢者住宅の安全性向上で改善作業を始めた。私たちは秀林郷にある九つの村を全部回り、次に万榮郷、卓溪郷の村の全域でそれを実行した。

安全な住まいへの改善の焦点は、安全手すりの取り付け、滑り止め措置、バリアフリースロープの設置、洋式トイレへの改造で、この四つが基本である。村長と町内会長に住居の安全性を説明し、認識を得た後、彼らの手を借りて宣伝、調査、登録をしてもらい、村全体の

改善工事を実行に移した。

花蓮で一定期間推進した後、二〇一六年に他の県や市にも拡大し、二〇二〇年には「安美プロジェクト」として、台湾全域で進める施策の一つになつた。「安」とは、すべての慈濟のケアと救済の対象者が安全に暮らせるようになることであり、「美」は、「善美を尽くした社会」から取つた。慈濟は多くのコミュニティ型慈善プロジェクトを推進しているが、その焦点は「隣人同士の助け合い」であり、「仁」のある場所に住むことが良い」のである。

安全な住まいへの改善だけでなく、適切な福祉用具も障がい者と高齢者の生活

の質を向上させる。例えば、長期間寝たきりの人は、往往にして排尿が不完全で、尿路感染症に罹りやすい。もし角度調整機能付きの電動ベッドで起き上がることができれば、排尿がスムーズになり、健康新にも良い影響をもたらす。

エコ福祉用具プラットフォームは、二〇一七年に花蓮から始まった。しかし、それ以前から台北市と新北市では、すでに多くの慈濟ボランティアが、回収した福祉用具を修理し、必要とする人々に提供していた。その後、東部、北部に

広がり、中南部もその後を追い、今では台湾の全ての県と市で提供できるようになっている。

多くの県と市の福祉用具資源センターでは、賃貸または無償で中古のものを貸し出すサービスはあるが、地元に戸籍がある住民だけが申請でき、県や市を跨いで貸し出すことはできない。慈濟エコ福祉用具プラットフォームの最大の特徴は、県や市をまたぎ、さらには海を越えてサービスを提供できることである。

例えば、台湾北部にやって来た南部高



陶器の洗面台では体重を支えられないため、修繕ボランティアはその周りに、W字型の手すりを取り付けて高齢者がしっかりと掴むことができるようとした。(撮影・蕭耀華)

雄の若者が、故郷の高齢者が車椅子を必要としていることを知った時、慈濟エコ

福祉用具プラットフォームのHPの申請ボックスにチェックを入れ、連絡先の住所と電話番号を入力するだけで済むのだ。

情報システムから高雄の福祉用具チームに連絡が届くと、在庫から車椅子一台が調達されて、ボランティアが申請者の指定住所に届けるのである。離島の澎湖や金門の人もサービスを利用できる。

たった1本の手すりを付けることで、住まいの安全性が改善される。隣近所への思いやりが社会参加を促し、エコ福祉用具が直ちにニーズを満たしてくれる。慈濟は多様な施策で高齢者を大切にしている。（撮影・蕭智嘉）



高齢者にとって安全な住まいへの改善、地域ケア拠点、エコ福祉用具プラットフォームの他、慈濟の愛あふれるお弁当の配達や近隣の高齢者同士が交流する計画、集会所でのAED（自動体外式除細動器）設置、防災士の配備などがある。

全体的な寄り添いプログラムに一つ一つ丁寧に取り組み、高齢者の生活環境や移動の面で、より安全になるようになると願っている。高齢者の転倒予防こそが、老後の生活が豊かにするのだ。

（慈濟月刊七〇三期より）

高齢者の安全な住まいへの改善プロジェクト

一人暮らし高齢者、老老世帯、障がい者及び恵まれない家庭のための安全な住まいへの改善。

改善の焦点・安全手すりの設置、バリアフリースロープの設置、床に滑り止め措置、和式トイレから洋式トイレへの改築、照明の改善。

2024年は、台湾全土で改善が必要な世帯が4,646戸報告され、ボランティアは4,578戸を調査し、4,088戸を改善した。

無常の世に情のある祝福

人生とは苦しいもので、この世は無常であることを警告しています。

放下するのはとても難しいですが、これがまた生命の教育なのです。周りの縁を大切にし、分秒分かたず精進して奉仕し、

互いに祝福し、励まし合いながら、菩薩道を歩んでください。

人生の無常は嘆かわしいもので、生・老・病・死という自然の法則は、明らかな道理ですが、忘れられない人がいます。皆さんも昇航（スン・ハン）

を知っていると思います。彼は青年の頃から慈濟に参加して、多くの慈青を招き入れだけでなく、結婚して一家の主人になると、慈濟の志業精神を担

い、フィリピン支部の大黒柱となつて、数多くの人たちと良縁を結びました。

フィリピンと台湾は地理的に近く、慈濟の情も深く、毎回風災や火災、震災などの災害が発生すると、救済に大変な労力と思いやりを注ぎ、フィリピンの慈濟人がたくさん奉仕してくれたことにとても感謝しています。二〇〇九年の台風十六号（ケツツアーナ）や二〇一三年の台風三十号（ハイエン）

被害では、慈濟が「仕事を与えて支援に代える」方式によって、街全体で数十万人を動員して、町の復旧を果たし

ました。容易なことではありません。その時の昇航さんは弱冠三十幾つで、参加者の確認と賃金の支払いをしなければなりませんでした。瘦せた体で台上に上がり、マイクを持つて人々に話しかけていた姿が、今でも私の脳裏に残っています。

昇航はご家族の縁に育まれ、慈濟の道場に入るようになり、更にフィリピン慈濟人を導いて成果を上げました。彼は一粒の非常に堅固な種のように、生涯肠道に逸れることなく、世のために奉仕してきました。しかし彼の過去

生の因と縁により、この種が大木になるまで待ってくれませんでした。とても惜しまれることで、心が痛みます。私の心中では、彼は永遠に青年のままでです。投入して、人々を導いてくれた若者の模範でした。如何にして彼を手放せば良いかわかりません。皆さんも永遠に彼を忘れないと思います。

五十一歳という若さで、三十年以上も慈濟に尽くしました。彼の慧命はとても長く、生命価値は充分なものでした。彼の模範的な行動は、私たちが手本にしなければなりません。彼は、自

ら道を切り開いて広くし、自ら造つてきました。心は清浄そのものでした。彼の行く路を私たちは、心配する必要はありませんが、彼のこのような情を祝福しなければなりません。

昇航は修行を積んでおり、道理に明るく、因縁がやつて来た時は、さっぱりと離れて行つたのだと思います。彼は既に解脱し、弱々しい古い体から抜け出し、何の気掛かりもなく、早く逝つて早く戻つて来て、未来の道を教く人になり、私たちの菩薩道を引き継いでくれることでしょう。彼は入院す

る前、応接室のあの窓辺に座つて、私の法話を聴いていた時、彼の心はとても軽やかで安らぎに満ちていました。彼はこの生涯で道をとても歩きやすいものにしてくれました。そして良い縁にも恵まれていました。彼は既に福德を携えて、彼と縁のある慈濟人の家庭に生まれ変わり、人々に笑顔を振り撒く可愛い子供となつており、その幸福な家庭ですくすくと育まれていることを、私は確信しております。

放下することは非常に困難なことはあります。これが修行の道なので

す。私たちは彼のことを心配せず、彼が私たちに生命の教育をくれたのだと理解し、彼を思い出したら、思い切り胸を張り、一秒でも多ければ、それだけ精進するのです。

彼の病は稀に見る疾病で、私たちの医療体系は全力を尽くし、放棄することなく、海外にもこのような症例がないか、治療の薬はあるのかを探し求めました。これにより、医療スタッフはこの病源をさらに研究し、可能な治療法を探る必要があると感じるようになりました。彼はその人生で病気の症状

を示し、医師や科学者、生理学者に研究を深め、より多くの患者を助けるよう促したのです。そう考えれば、彼の功德にもなるでしょう。

仏陀が人間（じんかん）に来て仏法の真理を説かれましたが、最も真実の法が無常です。人生において物質または生命にかかわらず、そのすべては因縁によって生滅します。人生とは苦しいもので、また私たちに、この世に永劫はなく、全てが千変万化し、心のままに満足を得ることは難しい、と警告しているのです。誰にも今日、明日に起ころる事は知り得ません。今日が過ぎ、

成した事はその大小に関わらず、因は既に定まり、縁は成り立ち、それが累積するだけです。過ぎたことは過ぎ去り、それを取り戻すことも留める事もできませんが、私たちは智慧を啓発しなればなりません。

時間は影も形もなく、あつという間に過ぎ去ります。私たちは生命を大切にし、人生を本来の価値があるようにし、価値ある方法に費やすなければなりません。昇航を思うと、私は直ちに生命と因縁を無駄にしないように、と感じるのであります。顧みると、自分も自然の法則に則つて、年を取り、体力も衰えました。しかし、息をしている間、声に出して話ができる限り、日々の良い話を来て、絶えず気力を振り絞つて奉仕します。

情を放下するのは難しいですが、時は過ぎて行き、ゆっくりと回復するでしょう。常と無常の間で、達観し、納得することです。その実、道理はとても平凡でも、思い詰めると煩惱が起きます。人と人の間は、どんな時であつても、お互いに祝福し合い、周りの因縁を大切にし、互いに励まし合つて、菩薩道をしつかりと歩きましょう。道さえ正しく數き詰めれば、未来の長さ



に關係はありません。これが生生世世歩くべき道で、どんなに短い時間でもこの思いが途切れではならず、緊密に繋げて、大願力を永遠に持ち続けるのです。皆さんの精進を願つております。（慈濟月刊七〇四期より）

家族で休日を楽しく過ごす

問

子どもに童年的思い出を残してあげたいと思うのですが、正月や祭日に旅行をすると、どこも人で混んでいる上に、費用も割高です。独創的な休日を過ごすアイデアは何かありませんか。

答・私の大学のクラスメートは孫を持つ歳になりました。旧正月の時に、クラスメートのライングループに届い

た動画を開いてみると、一般的な新年の挨拶動画だと思っていたのが、三世代の春節団らんの「特別番組」だった

のです。

動画では、お祖父さんとお祖母さんが、おめでたいおわん型のつばの無い帽子を被り、子どもたちはお正月の新しい服を着て、祖父母に新年のお祝いの言葉を口にして、自分たちの得意な芸を披露していました。一番面白かったのは、二

方を真似たり、猫が手のひらを舐めたりするところが、すごくリアルでした。クラスメートたちは皆その動画に「いいね」を押しただけでなく、「来年の旧正月も同じようにやってね」というコメントがたくさんありました。

計画を立てる過程も楽しい

い子ども言葉で、「お祖父ちゃん、お祖母ちゃん、新年おめでとうございます。ニヤー、ニヤー、ニヤー、お年玉をちょうだいね」と。途中の猫の鳴き声や歩き

親友のSは、小学校の担任のやり方がなかなか忘れられませんでした。「林先生は若くて創造力が豊かでした。例えば、端午の節句に関する授業をする時、

ステージで物語を語ったり、歌や演技をしたりするよう、生徒たちに前もって準備させました。後に私が教師になつた時も、それをモデルにして、前もつて学生たちに予習させたり、斬新なアイデアを考えてもらつたりしました。そうすることで、より活発で面白い授業になったのです」。教室だけでなく、家庭での娯楽にもこの方法は使えます。

祭日には家族全員で登山に行くという、特別な家族もいます。

どの山に登るかは子どもたちが選んで、登山ルートを計画し、キャンプ場

も子どもたちが決めます。もちろん、こうすることは子供たちがある程度大きくなつてからないとできませんが。

ある年、玉山に登りたいということでお、家族全員で話し合つた結果、登山難易度4のルートでることに決めました。タタジャヤから玉山連峰に行つて、またタタジャヤに戻るルートで、往復するのに数日かかるのです。親は子どもたちに登山ルートを計画させ、インターネットで入山時間を予約し、「登頂証明書」の申請も任せました。

数年間に、一家は何度も登山してお

り、キャンプ場や必要な食糧など全てを子どもたちに任せました。

登山する過程で、歩行困難や高山病になつたこともありましたが、子どもたちは一つ一つ乗り越えて、登頂に成功し、「登頂記念証明書」も手に入れました。

今回の登山は、時間が長くかかり、難易度も高くなりましたが。「子どもたちが事前に綿密な計画と準備をしていなかつたら、失敗に終わる、怪我したり、山から降りられなかつたりしたかもしれません



い」と父親が言っていました。或る人が、玉山に登った後の最大の収穫は何だったのかと聞くと、「子どもたちがより慎重になつたと共に、環境保全と登山倫理を積極的に学んだことです」と父親が言いました。

自分の家族だけの思い出を作る

子どもたちに忘れられない童年的思い出を残してあげたいのなら、正月や祭日には必ずしも人で混んでいる観光地を訪れる必要はないでしょう。特別

な娯楽プログラムを企画して、それをビデオに残すこともできるのです。子どもたちに、祭日に関連した物語や歌を準備させて、家族の前で披露してもらうアイデアもあります。子どもたちが成長するにつれて、彼ら自身で計画を立ててもらうのです。こうした普通と違った活動をすれば、子どもたちはきっと、その祭日の光景を一生忘れないでしょう。

（慈濟月刊七〇一期より）

幸いにも私は彼の側にいた！

医師は電話を受け取ると、直ちに救急外来に駆けつけ、救命処置に加わった。
思いがけず、そこに横たわっていたのは、
自分を養い育んしてくれた父親だった。
このような苦しみは、誰にも受け入れがたいものである！
私は彼の側に行き、上着を脱いで彼に掛けた……。

救

急車のサイレンが、夕方の混雑した車の列に響き渡り、一路、台中慈済病院の救急外来へ急行した。

「あなた！私を驚かせないで！私に何か行き届かないところがあつ

命の贈り物

◎口述・黃靜力（台中慈済病院ボランティア）
編集・吳亞馨（慈濟ボランティア）訳・惟明

たら直すから……だから早く目を覚まして……！」救急外来の重症患者エリアから、心を引き裂くような泣き声が聞こえてきた……。

患者が病院の地下二階にある念佛堂に運ばれた時は、すでに深夜近くだった。その日の夜は寒波が押し寄せた。私はそっと医師の側に行き、上着を脱いで掛けた。

「師姑（年配女性ボランティアの敬称）、私はもう医者を続けたくないません」。「このような苦しみは、誰にも受け入れ難いものです」。私は彼の体を温めるために上着を掛けたが、それと同時に彼の「心」にも寄り添いたかった。

これは一年ほど前の出来事である。その日、夫婦二人は一緒に高齢者向けの活動に参加し、帰りのバスを待っている時に、夫が突然倒れたのだ。救急車で台中慈済病院に搬送されたが、「大動脈解離」と診断された。病院に到着する前にすでに息を引き取っていた。

勤務を終えて帰宅しようとしていた医師は、電話を受け取って、急いで救急外来に駆けつけ、救命処置に加わった。しかし、目の前の病床に横たわっていたのは、思いもよらず自分の父親だったのだ……。

医師の母親は、夫に向かって何度も呼びかけていた。娘は父の体に顔をうずめ、長い間沈黙していた。そして、息子である医師は私に、「師姑、これから何をすればいいのでしょうか？」と尋ねた。

「父は全てを犠牲にして私を育て、勉強するよう励ましてくれました。それなのに、最後の瞬間、私は父の命を救えませんでした。私はもう医者を続けたくありません……」と彼は涙を流しながら言つた。

医師でありながら無力であったという、胸をえぐるような痛みを抱えて自責していたその息子を、私はその日から、気にかけるようになつた。その後、彼の家庭に新しい命が誕生し、初めて父親になつた喜びが、傷ついた家庭に新たな希望をもたらした。「医者を辞めたい」

という気持ちは少しづつ変化し始めた。そして、彼は再び職場に戻り、自分にできることを続けるようになった。

病院では、日々様々な生命の物語が繰り広げられている。そこには、悲しみもあれば、喜びや温もりもあり、様々である。医療ボランティアチームが毎日、病院内を行き来して患者や家族を支えている。そして何よりも大事なことだが、病院に「前向きのエネルギー」を生み出し続け、苦しんでいる人を直ちに適切に支え、穏やかにその瞬間を乗り越えられるよう、病院を守っているのだ。

患者や家族が助けを必要とするのは、時間を問わない。私も疲れる時はあるが、いつも気持ちを取り直し、もっと学習して成長できるようになりたい。「幸いにも私はそこにいた！」と思うと、忙しさの後には、いつも喜びを感じる。自分が落ち着いていれば、他人にも安定した力を与えることができるのだ。（二〇一四年八月十七日 医療ボランティア合心幹事座談会より）（慈済月刊七〇〇期より）



あの年に私たちが一緒に建てた教室

フィリピン・ボホール島



十年前に建てられた仮設教室は、今も学校で使われている。震災を経験した児童たちは、慈済の就学支援を受けた後、社会を支える存在となっている。教育は貧困から脱出する希望であることを、フィリピン・ボホール島の再建に参加したボランティアたちは目の当たりにした。

10年前にインファン・キング・アカデミーの仮設教室を支援建設した台湾のボランティアが、かつての地を再訪し、生徒たちとの再会を楽しんだ。

フ イリピンのボホール島は有名な観光地である。ダイビングの天国と言われ、謎めいた小丘郡のチヨコレートヒルズや、珍しい保護動物であるメガネザルの生息地もある。このような印象深い観光地に加え、素朴でホスピタリティに溢れ、信仰深いボホール島の住民は、たとえ言葉が通じなくても、温かい笑顔一つで隔たりを溶かしてくれる。

二〇二四年十二月、大愛テレビ撮影チームはこの美しい島に足を運び、慈済ボランティアがこの十年間、地道に積み重ね

てきた歩みを目の当たりにした。その中でも特に教育は注目する価値があった。

フイリピンには数多くの大学があるが、多くの貧困家庭の子供たちは、中学教育さえも終えることができない。

二〇一八年のフイリピン教育省の統計によると、中学の中退率は入学者全体の11%で、たとえ中学を順調に卒業したとしても、大学まで進んだ割合は半数以下となっている。二〇二三年までの統計によると、フイリピンの人口一億一千七百万人余りのうち、十五%超

を占める約一千七百五十四万人が貧困ライン以下にあり、約三百万世帯が今の収入では必要最低限の生活すら満たすことができていない。平均的な五人家族では、月収は約一万二千ペソで、日本円にすると約三万円にも満たない。生活維持さえ困難な中、子供たちに教育を受けさせる余裕がどこにあるのだろうか。多くの子供たちは進学の夢を諦めざるを得ないのである。

そこで慈済は、ボホール島に対して、慈善、個別医療支援、そして教育方面から、離島の子供たちが学業を終え、貧困から抜け出す手助けをしている。

二〇一三年十月十五日、ボホール島でマグニチュード七・二の大地震が発生した。多くの建物が倒壊し、死傷者は多数に上った。飛行機で約一時間半離れたマニラから慈済ボランティアがボホール島に入り、被災状況を調査し、配付活動を行つた。しかし、その三週間後に台風三十号（ハイエン）が近隣のタクロバン市とオーモック市などを襲い、壊滅的な被害をもたらした。慈済を含む多くのNGO団体は急速そちらに支援の重点を移したので、ボホール島での支援活動は

震災後の最も心配な課題は教育



2013年10月、ボホール島で発生した強い地震により多くの校舎が倒壊した。サンディアン国立中学校では大木の下にテントを張って授業を再開した。(撮影・林炎煌)

慈済ものがたり



いつたん中断せざるを得なかつた。

一ヶ月以上が経ち、ボホール島の調査チームの一員であつた蔡青山（ツァイ・チンサン）さんが静思精舎に戻つて、台風被害への支援活動について報告した。すると證嚴法師は優しく、「ボホール島を忘れないように」と声をかけた。その言葉を胸に刻み、蔡さんは二〇一四年初めに再びボランティアたちとボホール島を訪れた。すると地元の政府職員が、「お願いです。学校を見に来てください。生

2014年7月にはカーメル・アカデミーの仮設教室が完成し、使用が開始された。

（撮影・博麗妮）

徒たちはもう何ヶ月もまともに授業を受けていないのです」と懇願した。

当時高校で最終学期に通つていたヴェルジーさんは、地震で教室が倒壊したため、クラスメートたちとテントで授業を受けっていた。晴れた日はとても蒸し暑く、雨の日はテント内に水溜まりができ、とても学習できる環境ではなかつた。彼女が卒業を控えたある日、慈濟ボランティアが被害状況の調査に学校を訪れ、仮設教室の建設支援を決定した。

教室の建材は六月初めに到着し、台湾からのボランティアチームもボホール島に入つて、保護者や教師、住民たちと共に教室の建設支援を決定した。

当時仮設教室の建設に参加した台湾のボランティアたちが、二〇二四年末にボホール島の慈濟集会所十周年記念に参加した。その日、記念行事が始まる前の空

十年後の心温まる再会

いた時間を利用して、一行はコルテス町にあるインファンント・キング・アカデミーを訪ね、当時寄贈した十五の仮設教室の使用状況を確認した。

台湾からの訪問団のリーダーである陳金海（チエン・ジンハイ）さんは、校内に入るなり懐かしい顔を見つけた。それは現地ボランティアのパトリシオさんだつた。パトリシオさんは学校の近くに住んでおり、当時、慈濟ボランティアが仮設教室の建設に来ているのを見て、自ら工事現場に入つて手伝つた。十年の時を経ての再会は、顔を見てお互に気づいた瞬間、嬉しさに笑顔がこぼれた。「彼

つけばもう十年も経つていたのですね」。甘さんは、こう説明した。「仮設教室」というのは名前の通り仮設なので、あくまでも二年から三年使われることを前提とし、正式な教室が再建されれば、役目を終えて撤去されるものである。「学校がその教室をとても大切に使つてくれていたことがよく分かります。屋根に少し雨漏りはしますが、それ以外は十年前とほとんど変わっていません」。

なぜ地震から十年も経っているのに、いまだに学校は再建する力がないのだろうか。実は、この学校だけが特別なわけではない。フィリピンでは、教育の普及

は本当に働き者で、何か部品が足りない時は彼に頼んで買つてきてもらいました。チームのみんなととても息が合つっていました」と陳さんが当時を振り返つた。彼は、勤勉さが故に、安定した仕事に就くことができた。教室完成後、校長先生からの信頼を得て、学校の警備員の仕事を任せられ、現在に至つている。

台湾ボランティアの甘清文（ガン・チン・ウエン）さんは思わず、少し古びた教室の柱を撫でながらつぶやいた。「目の前のこの二つの教室は、私が自ら組み立てたものです。建材を台中后里の連絡所に発注した時から関わつて来たのですが、気が

は進んでいるが、毎年の教育予算は限られており、さらにその資源は、離島やへき地に配分される頃には僅かになつていいのだ。予算が手に入らない学校は、再建の話が毎年、先送りされるのが現状だという。

公立学校の場合、数年待てば政府からの補助が得られるかもしれないが、この学校のような私立の教会学校となると、事情がさらに厳しくなる。地震や台風、そして数年にわたる新型コロナの影響も重なつて教会への寄付も減り、学校を維持するのがやつとなので、教室の再建は困難を極めている。

例えばインファンント・キング・アカデミーを直撃し、大多数の木造住宅がボホール島を直撃し、大多数の木造住宅が倒壊し、比較的頑丈とされる校舎で教室の再建に目途が立たなくとも、自然災害は容赦なく襲いかかってくる。二〇二一年、大型台風二十二号（ライ

愛を繋ぎ、再生パソコンで学びを支援



フィリピンの慈済ボランティア、蔡青山さんは教室を訪れ、先生と生徒の学習におけるニーズを把握した。

ミーでは、パソコン教室に元々三十台のパソコンがあつたが、在校生約四百五十人が交代で使用していた。しかし台風の被害を受けた後、正常に使えるパソコンはわずか八台だけになってしまった。必要台数には到底足りず、先生たちはスライドを使って操作を説明するしかなかつた。生徒たちは実際に操作する機会がないため、パソコン授業は「机上の空論」となってしまった。

ボホール島で初めて慈濟ボランティアとして認証を授かった黃三民（ホワン・サンミン）さんは、ある学校訪問の活動を通して、先生と生徒たちが授業で苦労していることを知り、解決の道を探そうと決心した。黃さんはボホール島に暮らす華僑の四世だが、祖父の代から子供たちの教育を重んじてきた。「今はデジタル時代ですが、パソコンの授業にパソコンがないなんて、想像できますか。これは生徒たちの学びにとつて大きなマイナスです」と語った。

彼はマニラにあるグローバルなパソコン会社に手紙を書いて支援を求めたが、返事はなかった。そのうちに、マニラでビジネスをしていた台湾出身の同じく慈濟人である陳兆揚（チエン・ヅアオヤン）さんと知り合い、彼が慈濟の新竹

再生パソコンチームに話を繋いてくれたことで、台湾とフィリピンの慈濟ボランティアたちが心を一つにして、修理、整備された再生パソコンをボホール島の学校に寄贈することができた。二〇二三年六月から二〇二四年十一月までの間に、新竹再生パソコンチームは、百五十台の中古パソコンを寄贈し、数十カ所の学校や児童養護施設に届けた。

新竹再生パソコンチームのボランティア吳雄麟（ウー・ショーンリン）さんは、同年の十二月十二日にインファンント・キング・アカデミーを訪問し、慈濟が寄

海を越えて再生パソコンが届けられた。生徒たちは待ちきれない様子で操作を始めた。



贈したパソコンを使用している先生や生徒たちと交流した。彼は約二年間、パソコンの整備と修理の活動に参加し、その基本的なメンテナンスや部品交換のスキルは今や熟練の域に達している。パソコンを寄贈した後、実際の使用状況を確認することで、今後の修理活動の参考に

ル島で簡易教室の建設支援を行つただけでなく、地震によつて経済的にさらに困窮し、それによつて勉強したくても学業を続けられなくなつた子供たちの状況を知つたことで、成績が良くて品徳を備えた貧しい家庭の子供たちに対し、大学進学をサポートした。

したいと考えた。そして何より、生徒たちがこの機会を通じて視野を広げ、学びを深めてほしいと願っている。

大学への進学を支える奨学金

慈濟ボランティアは十年前に、ボホール

ルでツル植物を探取し、それで籠を編んで売った。当時の話をすると、涙を流さずにはいられなかつた。「本当に辛い日々でした。ですから、慈済の奨学金を受けることが、私にとつて大学進学の唯一の道だつたのです」。

ヴィツキーさんは、仮設教室の床のタ
イル作りを手伝ったことがきっかけで慈
済と出会い、努力の末にボホール州立大
学への入学を果たし、慈済の奨学金資格
試験にも合格し、奨学生となつた。

もう一人の奨学生メナードさんも似た
ような境遇にあつた。彼の家は子供が多
く、姉がすでに大学に通つていたため、父

親には彼の進学まで支える余裕がなかつた。メナードさんはそれを理解し、大学進学を諦めて市場で荷物運びの仕事を始めようと考えた。そんな時、思いがけず、学校から慈済が奨学金を提供するという通知が届いたのだ。いくつも困難を乗り越え、ついに奨学金の試験に合格した彼は、念願の大学生となることができた。

ヴィイツキーさんやメナードさんはじめ多くの慈済奨学生たちは、大学生の間、毎月の人文講座を通じて慈済精神を学び、現地ボランティアと共にコミュニティ支援に取り組んだ。更に奥地の集落を訪れて高齢者を慰問し、児童養護施設

親には彼の進学まで支える余裕がなかつた。メナードさんはそれを理解し、大学進学を諦めて市場で荷物運びの仕事を始めようと考えた。そんな時、思いがけず、学校から慈済が奨学金を提供するという通知が届いたのだ。いくつも困難を乗り越え、ついに奨学金の試験に合格した彼は、念願の大学生となることができた。

毎月の人文講座を通じて慈濟精神を学び、現地ボランティアと共にコミュニティ支援に取り組んだ。更に奥地の集落を訪れて高齢者を慰問し、児童養護施設



ヴィックキーさんは、奨学金によって大学を卒業し、家計を改善したボホール島で最初に認証を授かった慈済委員だ（写真左）。2023年8月、慈済ボランティアがボホール島ロオン町で「新芽奨学金」授与式を行い、助成対象の学生たちと記念撮影を撮った（写真右）。

右・杜美霖撮影



慈済ものがたり

で子供たちと触れ合うなどの活動にも参加した。このような慈濟の人文教育を糧にして、彼らは大学卒業後、慈濟ボホール集会所に就職し、仕事をしながら社会貢献を続けている。

二〇二四年六月、公的機関に就職したヴィックキーさんは、十二月には台湾で行われた歳末祝福会に参加した。慈濟奨学生として初めてのボホール島出身者で認証を授かった慈濟委員となつた。

大学で農業を専攻したメナードさんは、卒業後にボホール集会所で「安心修繕計画」の推進に携わる重要なメンバーとなつた。建材は地元で調達し、支援を

変な家庭を助けられることに大きなやりがいを感じています」。

ボホール集会所は、二〇一四年から二〇二四年まで、延べ二千二百十一人に奨学金を提供し、そのうちの三百五十五人が大学を卒業した。その多くは安定した職に就き、雇用主からも信頼を得、家計を改善した。

観光の島に、善意の光がまたたく

同年十二月八日の夜、ボホール島に到着して黄さんの家を訪ねた時、彼は慈濟がこの十年間にボホール島で行つてきた

受ける人々も労働することで支援金をもうらう形で自らの家の建設に関わることができる。過去二年間、ほぼ毎月新しい家が完成し、引き渡し後は地域ボランティアが家庭訪問を引き継ぎ、それら困窮家庭の生活支援を行つていて。

メナードさんは、まずイナバンガ大愛村に五ヶ月間駐在し、住民に竹の栽培や、竹を削つて竹で編む建材にする技術を指導した。二〇二四年からは建設進度の管理にも携わるようになり、学んだ知識を実地で活かしている。さらに、彼は仕事の中で高齢者や生活困窮家庭をも支援している。「時には疲れますが、もつと大

様々な活動について、心に残つたことを語つてくれた。「一般の人が抱くボホール島のイメージは、きらびやかな観光地かもしれません。でも、それはこの島の本当の姿ではありません。ボホール島はとても素朴で、住民の多くは農業や漁業で生計を立てています。多くの家庭はいまだ貧困の境目にあり、子どもたちを学校に通わせる余裕がありません。こうした問題は、もっと多くの人々に関心を寄せてほしいのです」。

彼は、慈濟が当時再びボホール島を訪れてくれたこと、そして證嚴法師の「ボホール島を忘れないように」という一言

に、心から感謝している。その一言で多くの人が支援を受け取ることができるようになつたからだ。十年という年月は始まりに過ぎない。ボホール島の慈済ボラ

ンティアたちの願いは、もつと多くの地元の人が慈済のミッショニに参加し、愛の輪が島中に広がつていくことである。
(慈済月刊六九九期より)

慈済のあゆみ フィリピン・ボホール島

(2024年12月現在の統計)

- 慈済のフィリピンでの活動は慈善から始まつた。1991年にビナツボ山の噴火により800人以上が犠牲となつた際、證嚴法師はその年に受賞したマグサイサイ賞の賞金の半分をフィリピン政府の救援活動に寄付し、残りの半分で中国華東地域の洪水被災者を支援した。
- 1994年11月8日、慈済フィリピン連絡所がマニラに設立され、1997年9月11日、正式にフィリピン支部に昇格した。1995年に初の施療が行われ、2006年にはマニラに施療センターを開設した。その後、災害支援・貧困救済・教育支援などの活動を広げた。2000年以降、セブ島やサンボアンガなどにも拠点を設立した。
- 2013年10月15日、ボホール島でマグニチュード7・2の地震が発生し、10月19日、慈済ボランティアが見舞い金と毛布を配付した。
- 2014年、台湾の慈済ボランティアが、ボホール島コルテス、アンテカラ、ローンなど9つの町の19の学校で、仮設の**150**教室を支援建設した。2024年までに延べ**2,212**人に奨学金を提供し、そのうち**355**人が大学を卒業した。
- 2016年にはイナバンガ市と協力し、地震の断層帯に位置することで、大きな被害を受けたリバーサイド地区の住民のために**67**棟の仮設住宅を建設した。
- 2021年、台風22号(ライ)による被災地支援を実施。
- 2022年6月より「安心修繕計画」を開始し、一人暮らしの高齢者や困窮する家庭のために住宅を建設。2024年12月までの累計は**250**棟である。
- 2024年12月17日、台湾の企業家・陳其毅さんと台湾のハマックテクノロジー社から寄贈されたソーラー型海水淡水化装置が、淡水資源のないバンゴンバンワ島に設置された。



離島の中の離島

飲み水の確保が難しい

(撮影・陳義銘)



フィリピン・ボホール島沖の小島、バゴンバンワ島は、サッカーフィールド三、四面分の大きさしかなく、千三百人余りが暮らしているが、淡水資源が無いため、飲料水や生活必需品は全て、大きな島からの補給に依存しており、毎月の飲料水代だけで収入の一割に上る。このような状況が、ボホール島周辺に点在する八十以上の小島でも同様な問題となっている。

文、撮影・蕭耀華（慈濟月刊誌カメラマン）訳・何慧純
資料提供・江季芳（大愛テレビ番組制作部企画）



海を眺めてつくるため息

バゴンバンワ島には公道としての桟橋がなく、荷物の積み降ろしは全て、人が背負って、海水の中を歩いて岸まで運んでいる。

バゴンバンワ島は、ボホール島で一番賑やかなトゥビゴン港から船で約一時間かかる。トゥビゴン市では五ガロンボトル入り飲料水は一本40ペソ（約100円）だが、バゴンバンワ島に輸送されると、その価格は60ペソ（約150円）になる。或る民家の前には空のボトルがいっぱい置かれ、トゥビゴン市へ運ばれて再び補充されるのを待っていた。



井戸水の淡水化

島内には飲料水の自動販賣機が設置され、ポリ袋も提供されており、1ペソを投入すると、約250ミリリットルの飲料水が買える。（写真左）

島でよく見かける井戸の水の塩分は海水よりやや低く、主に洗濯や清掃に使われているが、淡水化して飲料水の供給源とすることも可能だ。一年をかけて設備の設置と検査を終え、2024年12月17日、慈済ボホール島連絡所は、バゴンバンワ島に太陽光発電による海水淡水化装置を提供した。（写真右）

この設備は台湾のソーラー/パネルメーカーの陳其毅氏と、台湾ハマク科技会社が共同で寄贈したもので、一日に約5千リットルの淡水を生産することができる。バゴンバンワ島及び近隣のマカボック島合計2千人の住民に、一人あたり一日2・5リットルの飲料水を供給することができる。



達成感

責任を受け、その重さを知ることで、「やり遂げた」という心が軽くなる喜びを感じることができます。

慈濟の慈善活動の特別な点

日本の岩手県大船渡市で、二月二十六日から山林火災が発生しました。慈濟は四月に現地を訪れ、見舞金と共にエコ毛布やショールを配付しました。さらに、ボランティアは自ら温かい食事やお茶菓子を作り、地元住民の心と体を愛で温めま

した。思えば二〇一一年に東日本大震災が発生した際に慈濟人が最初に駆けつけた被災地、それが大船渡市でした。そして、十四年前に蒔いた愛の種が今、芽を出して成長し、地元ボランティアになつたのです。

四月六日、宗教処スタッフの報告を聞いた後、上人は次のように語りました。

「一般の人は平穏無事な時には苦しみを感じることはなく、『無常』という概念もないかもしれません。しかし、突然災害に見舞われると、苦しみと無常を痛感するものです。東日本大震災の後も、慈濟人と東北の被災地の人々がこのように糸を維持していることに、心から感謝しています。本部は地元ボランティアと緊密に連携していきます」。

「これまで、私たちはこの糸を強くして大切に保ってきました。これこそが慈濟と他の慈善団体との違いなのです。慈濟は大衆の小さな愛の力を集めて大きな力



いち早くボランティア精神を發揮するのです。だからこそ、地元で災害が起きた時に、地元の慈済人が動員されるようにと願っています。それでこそ、責任を果たすことができます。責任を担うことでその重さを知り、慈済の活動経験を積むことで、『やり遂げた』という達成感で心が軽やかになり、喜びを感じることができます。

たちを温かく抱擁してお世話をし、菩薩の精神を実践しています。そのため、どの国や地域で災害が発生しても、情報を受け取ると迅速に被害状況を把握し、地元の慈済人が無事かどうか、支援が必要かどうかを積極的に確認すべきです」。

法縁者と共に力を出す

「私は、日本の慈済人が被災地で炊き出しをし、人と人との交流を大切にし、長期的に寄り添い続けている姿を見ています。悲しみに暮れる高齢者や女性、子ども

四月二十五日、慈善事業の管理職及び職員たちと懇談した際に、初期の写真の中の一枚、訪問活動時に乗っていたバスが川床にはまつて委員たちがバスを押し



ている写真について、上人は次のように述べました。「初期の頃は人数も少なく、力も弱かつたため、すべて自分たちで行いました。委員を連れてどれだけ歩き、どれほどのこの世の苦難を目にしてきたでしょうか。いつも人々の苦しみはいかばかりかと思い、その姿が頭から離れませんでした」。

上人は次のように当時を振り返りました

岩手県大船渡市では、2月末にこの30年間で最も大規模な山林火災が発生した。ボランティアは4月5日から6日にかけて被災した地元住民にお見舞金を手渡した。(撮影・呉惠珍)

た。「その時、空が灰色になつて小雨が降り始めたので、とても心配していると、大型バスが川床の砂利にはまつてしましました。委員たちは力を合わせてバスを押し、運転手も懸命にアクセルを踏みましたが、押せば押すほどタイヤは空回りし、車体は傾き、片方のタイヤはさらに深く沈んでいきました。委員たちは皆主婦でしたから、どうすることもできず、途方に暮れていきました。当時は携帯電話もポケットル貝もなく、連絡手段はありませんでした。幸いにも、地元の住民がトラクターで、バスを引っぱり出してくれました」。

またこう述べました。「慈済を始めて以来、様々な問題に遭遇すると、バスが川床にはまつたこの時のような気持ちになつたものです。無謀とも言える挑戦をして、一般の人は多くの資源と努力を要すると感じることを行つていました。しかし、幸いにも良い縁に恵まれ、これだけ多くの人々に支えられながら、進んでくることができました。バスが困難な状況に直面した時のように、多くの支えを受けて乗り越えることができたのです」。

「慈済人は今、世界六十八の国と地域に広がり、一緒に世の人のために活動して

います。皆が心して大きな力を出しており、このような見返りを求めずに奉仕するという大愛のエネルギーは、とても貴重なものです。私たちが地に足をつけ、昔、川床でバスを押した時のように、志を同じくした法縁者と共に力を合わせましょう。そこで止まつてしまふのではなく、皆で共に努力をしてください」。

(慈済月刊七〇二期より)



1970年、半年に一度の台湾慈善再訪問の途中で花蓮県鳳林鎮の六階鼻川を渡ることになつたが、乗っていたバスが川床にはまつてしまい、全員で力を合わせてバスを押した。
(撮影・證嚴上人)

慈済の出来事

6/20
—
7/21

◎訳・
済運

台 湾

Taiwan

- 中型の台風4号（ダナス）が7月6日、嘉義県と台南市、雲林県に被害をもたらした。ボランティアは救済活動を開催し、2万食の炊き出しをして延べ1万世帯に寄り添い、ネットを通じて若手ボランティアに、学校の清掃や被災地の復旧活動に参加するよう呼びかけた。7月中旬から屋根の修復作業が始まった。



復興作業には、台湾全土の慈済人が連携して大規模な支援活動に取り組んでいる。特に台南市七股区では住宅の被害が深刻で、ボランティアが家庭訪問をして寄り添っている。（撮影 黄筱哲）

● アメリカとメキシコの慈済ボランティアは、毎月ティワナ市で貧困世帯への施療を行なっているが、現地では身障者に対する歯科衛生教育と治療技術に欠けていたことがわかった。そこで、台湾の慈済人医会メンバーで特殊医療ニーズ専門の歯科医を招き、衛生教育と施療を行なった。4日間で119人を治療する一方、特殊ニーズ歯科研修討論会を開き、参加した現地の歯科医130名と交流した。（7月9日～12日）

メキシコ Mexico

● 5月中旬、ブエノスアイレス州カムパーナ市サンカイエタノで水害が発生し、ボランティアが6回現地調査に訪れた。被災者の最も必要としている物が、防寒物資と清掃用品であることを確認し、市政府の協力を得て配付者リストを作成すると、バケツ、雑巾、洗濯洗剤、トイレットペーパー、毛布などの物資を、7月7日までに735世帯に配付した。

アルゼンチン Argentina



● 2025年6月、民間の週刊誌タイムズ・ハイアー・エデュケーションによる世界に影響を与える大学ランキングが公表され、慈済大学は国連の持続可能な開発目標SDGs3「健康と福祉」領域で世界第64位に入り、長年にわたる健康ケアと医療研究、コミュニティ奉仕など多方面の実践が紹介された。

台風通過後、雨が断続的に降る中、ボランティアは安心家庭訪問を行い、お見舞いと證嚴法師の手紙を被災者に届けると同時に、被害の調査と援助の査定を行なつた。（撮影・黄筱哲）

アメリカ USA

● テキサス州中部で独立記念日の休暇中に山津波が発生し、幾つもの地域が甚大な被害を被り、130人以上が犠牲になった。被災地ではしばらく通行制限が行われた。ボランティアは7月中旬に現地調査を開始し、赤十字社と協力して買い物カードと物資の配付を行なう予定である。

スペイン Spain

● 2024年10月のバレンシア地方で起こった水害の被災者を支援するため、台湾、イギリス、ドイツ、フランス、オランダ、ポーランド、イタリア、イス、アルゼンチン及び現地スペインの10の国と地域から51人のボランティアが駆けつけ、7月9日から15日まで6つの甚大被災地で3044世帯を対象に、買い物カードの配付を7回行なった。

洪水が引いた後、被災地で復旧活動が始まつたものの、ベネツィエラでは一部の道路が厚い泥に覆われたままであり、道路脇には水に浸かった車が仰向けでまだ取り除かれていた。稀に見る豪雨が30年来の致命的な水害をもたらした。古都として知られるバレンシア地方は甚大な被害を被り、多くの町は半年経つても復旧していない。ボランティアは復旧に力を添えた。（写真の提供・Veronica Chaparro Sornosa）



各国の連絡所

本部 971 花蓮県新城郷康樂 村精舍街 88 巷 1 号 TEL:886-3-8266779/886-3-8059966 志業センター（静思堂） 970 花蓮市中央路三段 703 号 TEL:886-40510777 # 4002 0912-412-600 # 4002	アメリカ 総支部 (San Dimas) TEL:1-909-4477799 北カリフォルニア支部 TEL:1-408-4576969 ニューヨーク支部 (New York) TEL:1-718-8880866	香港 TEL:852-28937166 フィリピン Manila TEL:63-2-7320001 タイ Bangkok TEL:66-2-3281161-3
花蓮慈濟医学センター 970 花蓮市中央路三段 707 号 TEL:886-3-8561825 玉里慈濟病院 981 花蓮県玉里鎮民權街 1-1 号 TEL:886-3-8882718 関山慈濟病院 956 台東県関山鎮和平路 125-5 号 TEL:886-89-814880 大林慈濟病院 622 嘉義県大林鎮民生路 2 号 TEL:886-5-2648000 台北慈濟病院 231 新北市新店区建国路 289 号 TEL:886-2-66289779 台中慈濟病院 427 台中市潭子区豊興路一段 88 号 TEL:886-4-36060666 斗六慈濟病院 640 雲林県斗六市雲林路 2 段 248 号 TEL:886-5-5372000	カナダ Vancouver TEL:1-604-2667699 メキシコ Mexicali TEL:1-760-7688998 ドミニカ Santo Domingo TEL:1-809-5300972 イギリス London TEL:44-20-88699864 フランス Paris TEL:33-1-45860312 ドイツ Hamburg TEL:49(40) 388439 オランダ Amsterdam TEL:31-629-577511 スウェーデン Goteborg TEL:46-31-227883 オーストリア Vienna TEL:43-1-7346988 南アフリカ Gauteng TEL:27-11-4503365 中国蘇州 TEL:86-512-80990980	ベトナム Hochiminh TEL:84-8-38535001 ミャンマー Yangon TEL:95-1-541494 マレーシア セランゴール支部 KL TEL:603-62563800 ペナン支部 Penang TEL:604-2281013 シンガポール TEL:65-65829958 インドネシア Jakarta TEL:62-21-5055999 大愛テレビ局 TEL:62-21-50558889 スリランカ Hambantota TEL:94(0) 472256422 ヨルダン Amman TEL:962-6-5817305 トルコ Istanbul TEL:90-212-4225802 オーストラリア Sydney TEL:61-2-98747666 ニュージーランド Auckland TEL:64-9-2716976
慈濟大学 970 花蓮市中央路三段 701 号 TEL:886-3-8565301 台北支部（新店静思堂） 231 新北市新店區建國路 279 号 TEL:886-2-22187770 慈濟人文志業センター 112 台北市立德路 8 号 大愛テレビ局 TEL:886-2-28989000 静思人文 TEL:886-2-28989888		

慈濟

2025年8月20日発行・344号

中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄
Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈濟伝播人文志業基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路 8 号

編集 慈濟日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@daaitv.com

慈濟基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈濟に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いに存じます。（日文組編集同人）



ミャンマー・マンダレーで強い地震が発生してから2カ月経っても、慈済ボランティアは被災地に駐在しながら米などの物資を届け、仮設教室の建設も行なった。5月11日には、ザガイン管区のマハーシー・コン・ジー・パゴダで支援物資の配付を行い、住民たちも福慧ベッドや白米の運搬を手伝った。
(撮影・郭威陽)(8~29ページの記事をご覧ください)



慈済日本サイト



慈済ものがたり